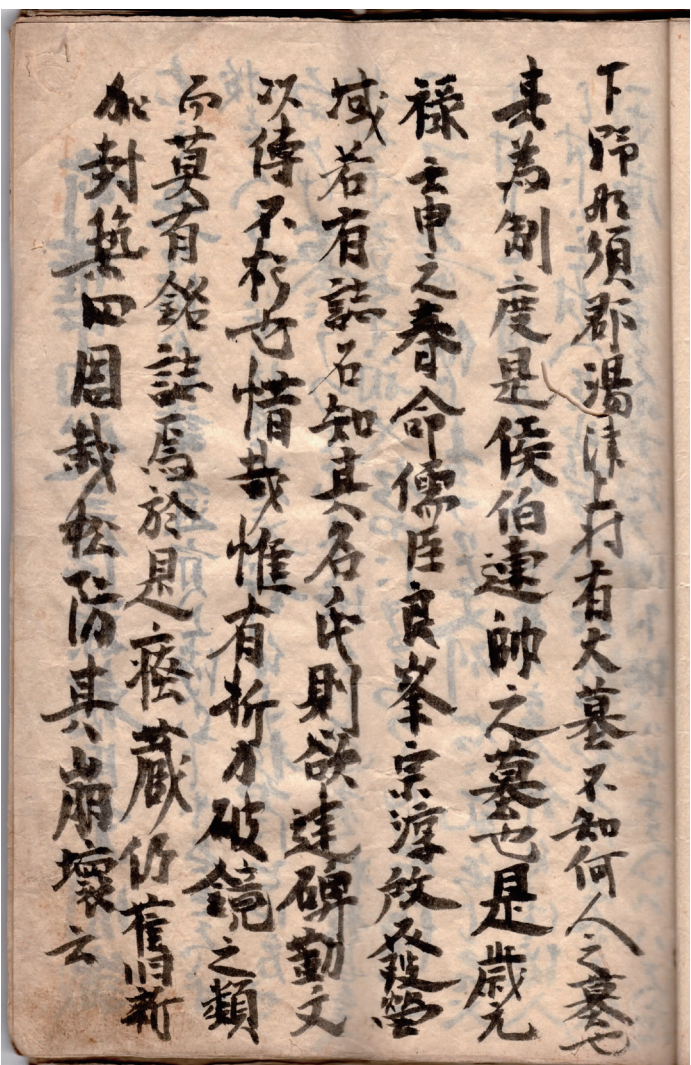


徳川光圀が箱に書いた文

下野の那須郡湯津上村に大きな墓があつて、だれの墓であるのかわからない。その墓の作り方からみて、これは地位の高い人の墓である。この年元禄五年の春に、儒学を修めた部下である良峯宗淳(佐々介三郎)に指示して、墓の中を掘り開き、もしも墓誌があつてその人の氏名がわかれば、記念碑を建てて書き記し、永く後々まで伝えようと考えた。残念なことに刀や鏡の破片などがあるだけで、墓誌はなかつた。そこで、もとどおりに埋め戻して、新しく盛り土を全体に加え、松を植えて崩れないようにする。



光圀の署名

出土品を木箱に入れる

古墳に木箱を埋め戻す

もとの権中納言 従三位 源朝臣光圀(徳川光圀)がしるす

右の両方の塚から出土した様々な道具は、上塚から出土した分は長さ一尺八寸(54センチ)、横一尺(30センチ)、高さ八寸(24センチ)の松の板の箱に入れて釘を打ち、松ヤニを四方に溶かしてかけ、墓に入れた。下塚から出土した様々な道具は松の板の長さ一尺(30センチ)、横七寸(21センチ)高さ七寸の箱に入れて松ヤニを溶かしてかけ、右のそれぞれの塚へ三月一日に納めた。箱の蓋に書いた文章を右に記しておく。箱に入れる時は三箇所の村の庄屋、組頭には与惣右衛門が立ち会つて釘を打ちつけ、塚に埋める時には三箇所の村の作業員を二十四人、下郷の庄屋の甚兵衛が立ち会つて、上塚の一丈(3メートル)底へ長さ一尺八寸の箱を納め、下塚には長さ一尺の箱を八尺(2.4メートル)底へ納めた。立ち会つた右の作業員、庄屋の甚兵衛が納めた。

